

2011 道東 TCM (北見) U-14 報告書

期 日 2011年9月19日 (日)
場 所 網走市呼人STF

1. 参加選手 (14名)

参加選手	所属チーム	参加選手	所属チーム
沼澤 翔真	SC釧路	石久保智也	鳥 取
高島 和輝	SC釧路	佐々木史人	景 雲
齊藤 茅人	SC釧路	阿部 雄馬	景 雲
森 康起	SC釧路	成田 涼弥	景 雲
島 拓人	SC釧路	関向 崇裕	富 原
長尾 知幸	鳥 取	林 賢佑	阿 寒
岩山 紘己	鳥 取	東 虎次郎	庶 路

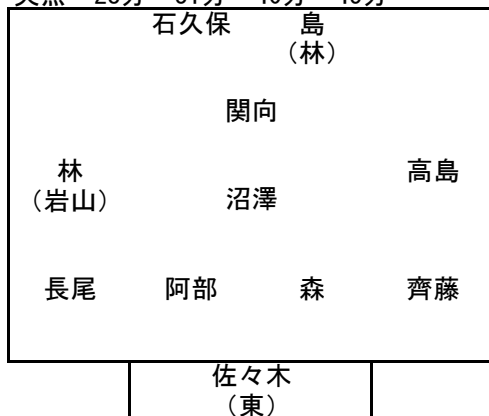
2. はじめに

U-14トレセンでは夏季のトレーニングで「守備」を中心としたトレーニングを行ってきた。守備の優先順位を考えながら、オフの場面で、ボールを奪うためにどこにポジショニングするのかわを確認した。個人的な守備からグループでの守備まで意識させた。地区のトレセンマッチでもその成果は少しずつ表れ、守備への意識の高さが窺えた。また、秋季からは攻撃への意識も高めるために、まずはチームとしてボールを失わずに前に運ぶことを新たな目標として取り組むため、今回のマッチでどこが課題になるかを選手と確認しながら、試合を行った。

3. 結果報告

① v s 網走

得点 5分 16分 26分
失点 28分 31分 40分 45分



② v s 十勝

得点 3分 45分 57分
失点 32分 38分 47分 51分



※ () 内は後半出場

4. 成果と課題

網走戦では、高い位置でボールを奪うこととサイドDFがボールもったときに周りの選手がどのように関わるのかわを確認して試合に臨んだ。守備面ではポジショニングに関して選手同士が確認しながら試合に臨んでいた。高い位置でのボール奪取から得点につなげる場面もあった。攻撃面ではサポートの位置が悪くうまくボールを動かせていなかった。裏への意識も薄く、ボールを持った時のゴールへの意識の低さを感じさせるものであった。

十勝戦では、相手の技術が高いことを確認し、前半はブロックを形成しくさびが入ったときに激しく奪いに行くことと決め、お互いの距離間を意識しながらプレーしていた。試合開始当初はDFラインをしっかり保ち対応できていたが、相手がドリブルで仕掛けてくると簡単に抜かれピンチを招く場面が多かった。また前半の終盤はDFラインが上げられなくなり、相手のくさびのボールに対して1st DFがいくのが遅れたことを感じ、ハーフタイムに選手同士反省していた。後半は攻撃を仕掛けようとしていたが、DFライン前にスペースが空いてしまい、そこを相手に利用され簡単に前を向かれ失点することがあった。また、ビルドアップでのミスで失点する場面もあり、今後の課題が浮き彫りになった。

「守備」

(良かった点)

相手がボールを保持しているときにボールが動くと、対応して細かくポジショニングを修正する姿が見られ、意識の高さがあった。1st DFは自分たちでしっかりいくように確認し合っていた。また2nd、3rd DFのポジションも1st DFの状況を見ながらとっていたのが良かった。

(課題)

1対1の場面で相手のフィジカル能力が高い時に何も考えずにやみくもにボールを奪いに行こうとして簡単に抜かれることがあった。相手をみてどう対応するか考えながら対応しなければならな

「攻撃」

(良かった点)

GKを含めてボールを前に運ぼうとする意識はあった。くさびが入ったときに、サポートに入ろうとしていた。ボールに関わろうとする動きが見られた。数少ない得点チャンスを生かしていた。

(課題)

まずは優先順位を意識すること。まずはゴール、裏、くさび……。ボールを失わずに運ぼうとする意識はかなり伝わってきた。しかし、前を見ていないため、相手選手が高い位置まで迫ってきているのに、そこにボールを当ててピンチを招く場面多くあった。まずは前を見ること、常に周りを見ること。次にサポートの距離感。すべてがサポートの位置が近い。そのせいで相手DFにすぐ寄せられミスをしてしまう場面がとても多くあった。もちろんそのDFをかわせる技術も必要だが、その前にどこの位置でボールを受けたら楽に前を向けるのか考えながらサポートしなければならぬ。相手から離れたポジションをとり、ボールを受けることが大事になる。最後にパスの質。パススピードが遅い。パスの出どころは良かったが、パスが弱いために相手に寄せられるてしまう場面があった。成長の差により筋力が違い辛いこともあるが、工夫したキックが必要。全てがインサイドキックではなく、距離が長ければインステップキックで低くて速いボールを蹴るなどキックの使い分けをしなければならぬと感じた。

4. まとめ

全体的には、トレーニングで積み重ねたことをしっかり試合で発揮していたという印象を受けた。特に守備面では試合が始まってすぐ相手の特徴を見極め、どこにポジションをとればよいのかなどを考えながら、自分で試合中に修正するなどの姿が見られ、自分で考え解決しようとしていて、成長がみられた。また選手同士で声をかけ合わせる場面が少しあったが、もっと場面ごとにどうすればよいのかコミュニケーションをとる場面が増えると良いと感じた。選手一人ひとりが高い意識を持ち組織的な試合をできたことは良い経験になった。新たな課題も確認できたのでこれからのトレーニングで克服していきたい。

文責 飯塚 順也 (大楽毛中)
伊藤 修 (春採中)